



四日目追加 HO
マリー





スマレに言われ、ロフトへ戻った。

魔法をかけられた人がこんな身近にいるなんて思いもしなかった。

スマレからしたら、魔法をかけた相手は『悪い魔法使い』なのだろう。

けれども、彼に魔法をかけたいと願った人間がいて、魔法使いはそれを叶えたに過ぎない。

——魔法を扱う者がおそれられるのも当然だ。

スマレの話を聞いてから、ずっと頭が重い。

寝衣しんいに着替えてベッドに横になる。

もう眠ってしまおう、そう思い、無理やり目を閉じた。

夢を見た。

流れ星が降る夜、魔女になった私は空を飛んでいた。

空はきれいで、星は近くて、たのしい。

けれども、そんな私を指さす人々がいた。

「悪い魔女がきた」

「村を滅ぼされてしまう」

「いなくなってしまう。早く、早く」

「魔女なんて嫌いだ」

目が覚めた。

最後に話した人の声は……たしかにスマレだった。

寝汗がひどい。





夢だ。

夢の中のことだ。

そうは思っても、動悸が治まらない。

ふと、読むのを止めていた日記に目がいて、ページを開く。

『五日目。夢見が悪い。』

書き殴ったような字で、それだけ書かれている。

ああ、本当に、嫌な夢だった。

汗を拭いたくて下へおりた。

水を汲みに外へ出る。

日の位置を見るに、お昼前だろうか。

スマレはいなかった。

夢のせいで、どんな顔で会えばいいのかわからなかったから、いないことに安堵する。

土砂や倒木が端に避けられていて、たった一人でこの量を撤去したことに驚いた。


彼にかけられた魔法の脅威を知る。

とても、人間にできる作業量ではなかった。

魔法をかけられた人間はおそれられているといわれているけれど、スマレに対する態度は絶対に変えたくはない。

はじめて会ったときから、スマレはスマレだ。

水を持ち小屋へ戻ると、テーブルに置いていた果物の中から、リンゴだけがなくなっていた。





リンゴがすきなのだろうか。

それにしても、休憩を取るように言っておいてよかった。
彼がいくら肉体労働に慣れているとはいえ、つらい思いや
大変な思いをしてほしくはない。

魔法のせいで苦しめられた彼のことを思うと、やはり、後
ろめたさや罪悪感が襲ってきた。

魔法のせい——つまり、魔法が使える魔女だったらそれを
どうにかすることができる？

ふいによぎった考えは、沈んでいた私の心を一気に浮上さ
せた。

沸かしたお湯を持ってロフトへあがる。

体を拭き、ワンピースに着替えたあと、すぐに本をあさり
はじめた。

なにか魔法を解く内容が書かれた本はないだろうか。

これでもない、それでもないと本を開いては読み、閉じて
いく。

気づけば日も傾き、お腹も空いていた。

本に夢中になっていたから、スマレが今なにをしているの
かわからなかった。

ロフトの窓から外を見ると、姿がない。

そういえば、今日はまだ一度もご飯を作っていない。

私は急いでロフトをおりた。

